

役員祝辞



自分史を書いてみませんか ～松下政経塾入塾式祝辞から～

拓殖大学顧問・松下政経塾理事

渡辺利夫

入塾おめでとうございます。試練の時間のスタートですね。今日、私は、一つの提案をもってやってきました。この機会に、皆さん、これまでの人生を振り返る「自分史を書いてみませんか」という提案です。

私は新聞社などの主催する作文・論文コンテストの審査員をいくつかつとめてきました。授賞式の挨拶などでは、次のようなことをいつも生徒や学生諸君に伝えています。

“若い世代の君たちも、家庭、学校、海外研修、地域活動、その他さまざまな場でいろんな経験を積んでこられましたよね。しかし、それらもこれを文章化しないと人生のささやかな経験としてほとんどが忘れ去られていきます。経験は文章化することによって初めて「経験知」となり、これが1つの確かなブロックとなります。別の経験を文章化してもう1つのブロックができあがります。いくつものブロックを積みあげていくと、簡単には崩れない経験知の塊ができます。その塊の大きさが、人間が成長したことの証です。さまざまな経験を、本当に自分自身の人生にとってかけがえのないものとするには、文章化が必要です。”

まあ、こんなふうに語りかけるわけですが、考えてみれば当然のことですよね。文章化された自分は、実はもう自分そのものではありません。自分の顔は自分ではみえませんよね。鏡という自分ではない他者に映し

出してみなければ自分の顔はわかりません。鏡に映し出された自分は本当の自分ではありませんが、それなくしては自分がどんな顔をした人間であるかはわからない。同じように、経験はこれを文章化しないと、その経験は自己評価あるいは自己分析の対象にはならないということをいっているわけです。

最後に、自分の経験からいえるもう一つの文章化の意味について申し上げます。文章化とは自分を「客体化」することです。誰も「悶々」の感情に襲われたことがきつとおありだと思います。しかし、この「悶々」の感情もこれを文章化してしまえば、書いた人はもうこの「悶々」を平静にみつめ、そしてそこから解放されて、つまり「否定的自我」から「肯定的自我」へと変じていくことができます。「魂の救済」といったら言い過ぎでしょうか。辛く苦しい経験を書いている最中は、辛く苦しいこともおありでしょう。しかし、経験をそのままに文章化していくと、書き終える頃には自分の心が随分と軽くなっていることに気づくはずですよ。

入塾の機会です。次の本格的な仕事に向かう前に、これまでの経験を回顧する「自分史を書いてみませんか」。以上が私の提案です。

